

教育上の課題と工夫

---

周産期保健看護演習の目標は、①紙上事例を通して看護計画が立案できる ②産婦・褥婦・新生児に必要な基本的な母性看護技術を習得することです。COVID-19の第6波を受け、1月から演習を遠隔で行うことになり、演習内容を見直す必要が生じた。その際、「周産期保健看護特有の学習内容を優先する」と「実習を意識した演習を行うこと」を重視し演習内容を見直した。「周産期保健看護特有の学習内容を優先する」に関しては、子宮復古の観察と母乳育児支援、沐浴といった3つの母性看護技術に焦点をあてた演習内容の見直しを行った。その結果、遠隔でも学生が主体的に演習に参加する工夫と教材の工夫の2点が課題として挙げられた。

課題の工夫として、①遠隔でも実際に学生が看護技術を行うこと ②教材の工夫として家にあるものを活用することに取り組んだ。①遠隔でも実際に学生が看護技術を行うことに関しては、遠隔演習では図書館で調べものをする時間が少ない、教員から直接指導が得られないなどを考慮し、看護技術に関する資料の事前配布や活用できるWEBサイト、eBOOKなどの紹介をした。また、沐浴の動画を作成し何度でも見られるようにした。技術演習の時には、教員が学生のアバターとなり、学生の指示に従って行動することで、学生が考えている行動（腹部を触る手の当て方など）がわかり、細かい技術指導を行うことが出来た。②教材の工夫として、バスタオルを活用した赤ちゃん人形を学生に作成してもらった。バスタオルを活用することで新生児の大きさや定額していない感じが再現でき、家でも出来る新生児の技術練習に活かすことができた。また、画面越しであるが、授乳の指導や沐浴の技術試験でも自分で作成した人形で行った。実際の新生児の重さを再現できなかった点は欠点であるが、何度でも家で技術を練習する機会になっていた。



<写真1>バスタオル2枚と輪ゴム13本で作った赤ちゃん人形（紙に目・鼻・口を書いてもらい赤ちゃんの顔を作ってもらいました）

---

With コロナに向けて

---

COVID-19感染拡大により演習や実習が遠隔になり、多くの変更と工夫が求められた。今回の遠隔演習で工夫したバスタオルで作る人形や作成した動画などは、今後の演習でも事前学習やオンデマンド教材として活用する。また、対面や遠隔、オンデマンドといった形態のメリットを活用した演習の展開を今後検討する。

---